
夢現

宵の明星

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢現

【Nコード】

N6120C

【作者名】

宵の明星

【あらすじ】

人々に向けて様々なメッセージを送り続ける不思議な者達と、そんな彼等のメッセージを受け取るうとする一人の高校生の物語。…
…彼等が生きてるのは夢か現か……

日記

珍しい日もあるもんだ。

今日は彼等に会えなかった為、退屈な一日を過ごしてしまった。

……まあ、こんな日もたまにはあるのだろう。

彼等の事は正直な話、今でもわからない。

俺にとっては、幼い時から見えて当たり前だったから特に気にしてはなかった。

しかし見えているのは俺だけだったから、幼い時は周りの人に彼等の事を言っただけで叱られたり、病気じゃないかと心配された。

だが、彼等は確かに存在する。

そして、存在してるからには必ず存在する理由があるはずだ。

そこで俺は思う。

……恐らく彼等は、なにかを伝えたくて存在しているのだと。

だから存在するのだと。

だから俺は……

彼等が何故存在しているのか

いや、

何を伝えようとしているのかを確かめたい。

だってそうだろ？

誰も彼等のメッセージに気付かなかっただら……

彼等がなんの為に存在しているのかわからない

それは寂しい事だし、
なにより彼等が報われない。

だから俺は彼等のメッセージに答えてあげたい。

彼等の力になってあげたいんだ。

ふう……

眠くなってきたし、
そろそろ寝るか……

特に書くことがないから、ずいぶん余計な事まで書いてしまった。

やはり慣れない事はするものじゃないな。もう日記なんて書くのは
止めよう。

そして俺は再び彼等に会える事を願い……

日記を閉じた……

2007年 夏

「桐島 樂」

風鈴

……そよ風に揺られて風鈴は鳴る……

……彼女の隣で風鈴は鳴る……

……それはまるで……

……美しく儚い、人の命のように……

……寂しく、揺れていた……

――

夕暮れ時、俺はいつも愛用している学生鞆を片手に持ちながら、いつもと同じ通学路を学生服姿で歩いていた。

この状況からして、学校帰りだという事が安易に想像できるだろう。事実、俺は今から家に帰るべく歩いているのだが……。

「……はぁ……」

俺は思わず深い溜め息をついてしまった。その理由は、彼等に二日も連続で会えなかった事が原因だ。

いつもなら普通に歩いてるだけで自然に会えるのに、昨日から彼等の姿が全く見えない。だから俺は今、少し落ち込んでいる状態になっている。

……まあ、別に耐えられない程辛いという訳ではないのだが、やはりいつも当たり前のように会っている人に会えないというのは寂しいものである。

……ああ、因みに彼等の事については俺自身も未だによく解ってはいないが、恐らく俗に言う幽霊や妖怪のようなものだと言えはいる。

何故かは知らないが、俺はそういったものが見える体質らしく、幼い頃から家族や近所の人によくその事で迷惑をかけていた。

なんせ周りの人間には彼等の事が全く見えてなかったし、その頃の俺も周りの人達にも彼等が見えて当たり前と思っていた為、始めの

頃は彼等の事を言っても叱られる程度だったが段々とそれがエスカレートしていき、最終的には病院の精神科に担ぎこまれてしまった事もあった。

……とまあ、そんなような事があってから俺は彼等の事を人前で言うのを止め、自分一人で彼等の事を今日まで見続けてきたが、さつきも言ったように彼等の事は殆んど分からないままだ。

……ただ、今まで彼等を見続けてきて一つだけ解った事がある。それは、

彼等は誰かに何かを伝えようとしている。

という事だ。俺が今までに出会った奴ら全員がなにかしらのメッセージを俺に訴えてきた。それを聞いて俺は、

……彼等を救いたくなった……

……彼等のメッセージに気付いてあげたくなった……

……彼等のメッセージに答えてあげたくなった……

……だってさ、彼等が必死になってメッセージを送っているのに、誰も気付かないなんて寂しいだろ？

だから俺は彼等のメッセージに答えようと努力し始めた。

初めの頃は彼等のメッセージにうまく気付く事が出来なかったが、段々と気付く事ができるようになり、最近は自然とメッセージに気付けるように（……まあ、あくまで気付くだけで彼等のメッセージに答える事はあまり出来ていないが……）なっていたのだが……

「……あゝ、あいつら何処に行っちゃったんだよ……」

俺は思わず呟いてしまった。

俺は彼等と触れ合っているうちに彼等と会話するのが楽しくなつてしまい、最近では毎日のように彼等と話していたのだが……
何故いきなり彼等は消えてしまったのか……。

「……どこかにあいつらがいそうな場所無いかな……」

俺はそう呟いた瞬間ある事を思い出した。それは、学校の教室で女子達が話していたある噂だった。

で、その噂というのが

「夕暮れ時に犬神社に行くと死神が風鈴の音と共に現れて魂を抜いていく」

……と、いうものなのだが……

……まあ、いかにも胡散臭くて信憑性が全く無さそうな噂だ。

しかし、普通の人からすれば根も葉もないただの噂でも、俺にとっては彼等を探す重要な手掛りとなる貴重な情報だ。

正直な話、こういった胡散臭い噂ほど彼等が関わっている確率が高い。それは今までの経験からして間違いはない。

と、いうことで……

早速、その死神が現れるという犬神神社に来てみたのだが……、いくら境内を探しても噂に出てくる死神のような奴はいないし、風鈴の音すらも聞こえてこなかった。

……まあ、流石にそんな都合よく現れるわけでもないのですが、俺は鳥居の柱に寄りかかりながら暫く待つことにした。

で、噂の死神を待っている間が暇なので、犬神神社について少し説明しようと思う。

犬神神社は俺が登下校する時に使っている通学路の途中にあり、鳥居をくぐった所にある本殿へと続く長い石段と庭に置かれている大きな狛犬が主な特徴の神社だ。

因みに犬神神社という名前は正式な神社の名前ではなく、庭に置かれている狛犬から勝手にそう呼ばれるようになった。恐らく正式な名前を知っているのは神社の神主ぐらいだろう。

と、そんな事を考えていると突然、

……ちりん……

……ちりん……

と、綺麗な風鈴の音が聞こえてきた。その音色はどこか寂しげだが不思議と心が安らぐ……そんな音色だった。

俺は、その音色に惹かれるように鳥居をくぐった。

……するとそこには、本殿へと続く石段の一つに腰を下ろしている一人の少女がいた。

その少女は見た目からして10代前半といった所か、まだ幼さが残ってはいるが小さく綺麗に整った顔立ちに、さらりと流れる美しい黒髪は長く、腰の辺りにまで達していた。

そして少女が着ている朝顔の模様が入った水色の着物は清楚で上品な雰囲気を漂わせ、一目見ただけでかなりの値が張りそうな一品だというのが解る。

そんな着物を着ている事から、彼女が裕福な家柄の子だという事がなんとなく見て取れた。

更に、着物の袖から少しはみ出ている白く透き通った小さな手には風鈴の紐が握られ、その紐の先に付いている風鈴が風に揺られて断続的に綺麗な音色を発していた。

……うん、可愛い……

俺は純粹にそう思ってしまった。

清らかで優しくも、どこか寂しく儚い……そんな雰囲気がする少女だった。

……て、いかんいかん……

相手は子供なのに俺はなにやってるんだ……。

……いや、よく考えてみれば俺も子供じゃないか……ってそうじゃないだろ！！

それ以前にこんな幼い少女を、俺みたいな変な奴と一緒に居させちゃ駄目だろ。

……あ、いや、別に俺は変態じゃないから。
ただ他の人には見えない奴らが見えるだけで、決して変態じゃないから。

……そう、俺はあくまで変人であり、変態ではない。……て、それ
もなんか違うだろうが！！！！

と、俺は心の中でよくわからない感情と葛藤していたが、彼女の顔をよく見た瞬間そんな考えは一瞬にして吹き飛んでしまった。

……なぜなら……

……少女が……泣いていたからだ……

……少女は悲しい表情を浮かべたまま涙を流し、その涙は彼女の白く綺麗な頬を伝わり滴となって落ちて、膝の上の着物を静かに濡らしていた……。

「……………」

それを見た俺はゆっくりと彼女に近付いていき、彼女の目の前で足を止めると、

「……こんにちは。……いや、こんばんわ……かな？」

と優しく微笑みかけた。

少女は俺に話しかけられた瞬間、はっと顔を上げ驚いた様子で俺の顔を見つめていた。俺はそんな彼女に対して、

「……隣に座ってもいいかい？」

と聞くと、少女は少し戸惑いながらも小さく頷いたので、俺は彼女の隣の空いたスペースに静かに座った。

……それから少しの間後、少女は俺を見ながら、

「……貴方は……誰？……」

と不思議そうに聞いてきた。そんな彼女に対し俺は優しい口調で、

「俺の名前は桐島^{きりしま} 樂^{がく}で、この町の公立高校へ通う高校二年生さ。

……君の名前は？」

と何気無い感じで答えると共に名前を聞くと、

「……ユキ……」

と彼女……ユキは、小さい声で一言呟いた。

「そうか、ユキって言うのか。……とてもいい名前だな。」

俺が素直に心で感じた事をそのまま彼女に伝えたと、ユキは頬を朱に染めて恥ずかしそうに俯いてしまった。

……ヤベッ、本当に可愛い……

て、だから違うだろうが……！！

俺はなんとか気持ちを切り替えると、

「……そういえば、どうして泣いていたんだ？ ……よかつたら話してくれないか？ もしかしたら、こんな俺でも君の力になれ

」

と俺はそこまで言い掛けて黙ってしまった。

何故なら、彼女が今にも泣き出しそうな悲しい表情をしていたからだ。

……まずい……地雷を踏んじまった。

俺は慌てて、

「……あ、……ごめん。なんか余計な事を言いちゃって……」

と心から彼女に謝った。そんな俺の言葉に対してユキは、首を横に振ってそんな事はないと伝えてきたが、表情は変わらず悲しいままであった。

クソッ！！ 何をやってるんだ俺は！！ 逆に悲しませてどうするんだよ！！

それから暫く二人の間に沈黙が流れたが、俺は意を決して、

「……そうだ。面白い話をしてあげるよ。」

と思い付いたように言うと、ユキは不思議そうな表情を浮かべながらも小さく頷いた。それを見て俺は、

「……よし、それじゃあ……」

とユキに話し始めた。

……面白い話とは言ったが別に大した話でも、なにか特別な話でもない。

最近学校であつた小さな出来事や、今まで出会ってきた彼等の事など、俺の今までの体験談を話したただけだ。

でも、そんな話をユキは目をキラキラと光らせながら夢中で聞いていた。

……どれくらい時間が経つたのだろうか。ふと気が付くと既に辺

りは薄暗くなっていたので、俺は家に帰ろつと思い、座っている石段から立ち上がるとユキが、

「……また……来てくれる？」

と寂しげに聞いてきたので俺は、

「……ああ、もちろんさ。ユキがいいと言つなら毎日来るよ。」

と微笑むと、ユキは嬉しそうに頷いた。

なので、それから俺は学校が終わると必ず犬神神社へ行き、その日あった事をユキに話してあげていた。

……そんなある日……

俺はいつもと同じように犬神神社へ来ていた。

ただ、いつもと違うのは来た時間帯が夕暮れ時じゃなく満月が綺麗な夜である事だ。

何故こんな時間帯に神社へ来たかというと、昨日ユキが別れ際に、

「……明日は……夕方じゃなくて夜に来て……」

と言ったので俺は言われた通りに夜になってから来たのだが……。一体どうしたのだろうか……

……まさか、愛の告白なんて事は！！ …… ある筈ないか……

と、少し調子に乗った事を反省しながら俺は神社の鳥居をくぐった。しかし、そこにユキの姿は無かった。

「……境内にいるのかな？」

俺はそう思うと、境内を目指して石段を登っていった。

そして石段を登り終わると広い境内の中で一人佇む少女……ユキを見つけた。

俺はゆっくり彼女に近づいて行った。近づくにつれてユキの姿がはっきりと鮮明に見えてくる。ユキはまだ俺に気づいてないようで、頭上にある満月を見上げていた。

そんな彼女の横顔は満月の光を浴びているせいか、どこか幻想的な美しさを感じさせた。そして俺は彼女の目の前で足を止め、

「……綺麗な満月だな。」

とユキに話しかけた。

その声にユキは気づき俺の方へ顔を向けると、

「……うん……」

と静かに頷いた。その時心なしか彼女が一瞬だけ悲しい表情を見せたかのように見えた。

「……なにかあったのか？」

俺はユキに優しく聞いてみた。するとユキは俺の手を持つとその掌に何かをのせ握らせた。俺はその何かを確認する為に手を開くと、そこにはいつもユキが持っていた風鈴があった。

「……ユキ、これは……」

俺は思わず困惑の表情を浮かべた。そんな様子の俺にユキは、

「……私の宝物……」

と表情を変えず静かに答え、更に続けて、

「……あげる……」

と俺の目を見つめながら言った。そんなユキの突然の行動に俺は少し戸惑いながらも、

「……そんな……ユキの宝物なんだろ？……本当にいいのか？…

…」

と聞くと、ユキは少し恥ずかしそうにしながらも、

「……友達……だから……。……大切な……友達だから……」

と俯きながらもはつきり俺に聞こえるように言った。

「……ユキ……」

「……もう行かないと……」

俺の言葉に対し、ユキは再び満月を見上げながら寂しげに言った。

「……樂……」

「……ん？」

俺は少女の呼び掛けに答えた。するとユキは視線を俺へ戻し、

「……私……いいんだよね？」

と不安気に聞いてきた。俺は何の事だか分からないでいると、ユキは俺の目を真っ直ぐ見つめながら、

「……貴方の友達でいて……いいんだよね？」

と真剣な表情で確かめるように聞いてきた。そんなユキの目からは拒絶されるかもしれないという恐怖と、拒絶された時に全てが壊れてしまいそうな危うさを感じとれた。

そんな彼女に対し俺は、

「……ああ、もちろんさ。ユキは俺の大切な友達だ。」

とユキの目を見ながら、はっきりと力強く答えた。

ユキはそれを聞くと安心した様子で、

「……よかった……」

と微笑んだ。

……そして、

「……ありがとう……」

と、彼女が最高の笑顔を見せた瞬間、その場に強い風が吹き荒れた。

「ッ！？」

俺は思わず目を瞑ってしまったが、風が吹いたのは本の一瞬の間だけだったので、俺は直ぐに目を開くと……

……そこにユキの姿はなく、ただ俺の手に残された風鈴が風に揺れて虚しい音色を奏でているだけだった……

ユキが消えてから数日後。

俺は部屋の窓辺で静かに揺れる風鈴を眺めながら、ユキの事を考えていた。

何故かユキが消えたあの日から再び彼等が姿を現すようになったが、その事に彼女がなにか関係していたのかは分からないし、結局、彼女が何者だったのかも分からなかった。

……だが、恐らく彼女は……

……ユキは……友達が欲しかっただけなのだと思う……

……お互いに相手の事を理解し、思いやれる大切な友達……

……そんな友達が欲しかっただけなのだった。

……あの後、彼女が何処へ消えてしまったのかは分からない。

……でも、ユキ……

……もう、大丈夫だよな？……

……だって、お前にはもう……

「……大切な友達がいるんだからさ……」

俺は、部屋の窓辺で揺れるユキが残っていた風鈴を眺めながら、
そう思った。

――

……そよ風に揺られて風鈴は鳴る……

……部屋の窓辺で風鈴は鳴る……

……それはまるで……

……美しく儚い、彼女の命のように……

……優しく、揺れていた……

……ちりん……

……ちりん……

舌切り雀・壱

……雀を助けた……

……喋る雀を……

「……あれ？ 驚かないのですか？」

「……ああ、まあな。……こういう事には慣れているんでね」

その日の朝、俺は高校へ向かう為いつものように通学路を歩いていると、その途中で一人の男が公園の真ん中で蹲っているのが見えた。

俺は初めその男が何をしているのか分からなかったが、よく目を凝らして見るとその男の足下には雀が一羽倒れていて、その雀に向けて男が石を何度も叩きつけているのが見えた。

「止める」

俺は素早く男に向かって走っていき、その男の手を掴んで睨みつけた。

そんな俺に圧倒されたのか男は、

「ひ、ひいッ!!?」

と、真拔けな声を出すと一目散に逃げて行った。

……あれ？　つか、今の村井か？

俺は逃げて行く男の背中を見ながらそう思った。

……今逃げて行った村井と言う男は俺の高校のクラスメイトで、休み時間中も他の生徒と話す事なく椅子に座ったまま黙って過ごしている……まあ、そんな感じの生徒だ。

……しかし、一体あいつは何を考えているんだか……。

命の重さという物を知らないのか？

……全く……最近の高校生は……石を叩きつけられた雀の気持ちも考えてみる、って今その雀を助けなきゃいけないんだった！！！！

俺は石を叩きつけられていた雀の事を思い出すと、足下に倒れているであろう雀に急いで目を移した。

が、そこには……

「ふう……、全くとんだ災難にありました。」

……そこには、何事もなかったかのように体に付いた砂を羽で払いながら言葉を喋る雀の姿があった。

……ほう、最近の雀は言葉を喋るのか。随分と凄い世の中になったものだなあ……

と俺は軽い冗談を言いながら比較的冷静に雀を観察していた。
一方、観察されている当の本人は、

「全く……、最近の子供は何を考えているのやら……。命の大切さというものを全く理解していないですね。こんな事だから……」

と俺の視線に気付いていないのか、羽（腕？）を組みながらぶつくさ文句を呟いていたが、暫くしてようやく俺の存在に気が付くと、

「……あつ！！ どうもすいません。いやあ、駄目ですね。ついついの癖で、自分の世界に入り込んでしまいました。」

と中々丁寧な言葉遣いで話した後、礼儀正しくお辞儀をした。
そんな雀に対して俺は、

「ああ、いや、別に気にすることはないさ。……それよりお前の方は大丈夫なのか？ あれだけ石を叩きつけられたのだから、かなり酷い怪我を負っているんじゃないか？」

と一度笑って答えた後、心配しながら雀に聞いたが、

「……心配して下さってありがとうございます。ですが大丈夫です。こんな姿ですが意外と頑丈なんであれ位どうってことないですよ。」

と雀は明るい声で答えた。

しかし、そのあと雀は首を傾げながら、

「……あれ？……ところで今更ですが……、私を見て驚かないのですか？」

と不思議そうに聞いてきたが、そんな雀に俺は、

「……ああ、まあな。……こういう事には慣れているんでね」

と微笑みながら答えた。

「……いやあ、なるほど。凄いですね桐島さん。貴方のような人が増えてくれれば私や他の他の達も嬉しいのですがねえ」

雀は感心した様子で言ってきたが、それに対して俺は、

「まあ、メッセージに気付いてもそれに答えられない事が多いからあまり意味がないんだけどな」

と苦笑しながら答えた。

あれから俺と雀は何故か意気投合してしまい、俺の過去の話しや、最近の人の気持ちについてなど、よく分からない事を話し合っていた。

「いやいや、それでも嬉しいですよ。まず大事なのは気持ちですからね。思わなければそれを実行することさえできませんから」

雀は相変わらず明るい口調で俺に言った。

そんな雀に対して俺は、

「……まあな、確かに人は何かをしたいと思わなければ行動しない。そして見えている物しか信じないのも人だ。

……だからお前達の事を見ることができない人間はお前達の存在を信じることはないし、お前達を助けようと思う筈がない。

……だからお前達の存在を理解してくれる人を増やす事は難しいだろうな……」

現に俺も周りの人間にお前達の存在を伝えようとしたが無理だったよ。

……だが、それでも俺はいつかお前達の存在が理解される日がくると信じてる。

……だからその日がくるまで俺が頑張らないとな」

と少し寂しい表情をしながら答えた。

それを見た雀は、

「……桐島さん。……貴方はやはり素晴らしい人だ。貴方ならばいつか必ず私達の事を他の人々に理解させる事ができますよ。その相手を思いやる気持ちを忘れなければ必ず!!」

と感激した様子で言ったが、その直後、

「……あつ!! 忘れてました……。そういえば先程助けていただいたお礼がまだでしたね」

と急に思い出した様子で言うと、いきなり雀の目の前に掌サイズ位の小さなつづらと俺の身長と同じ位の大きさがある大きなつづらが一つずつ現れ、

「ええと、いきなりで申し訳ないのですが、貴方は目の前にある大きなつづらと小さなつづらのどちらがいいですか？ 好きな方を差上げますよ」

と明るい声で聞いてきた。

……ん？ あれ？ つーか、このシチュエーションってどこかで聞いた事があるような……。えーと、なんだっけな？ 確かどっかで……あつ、

「……お前、まさか……」

俺は思わずそう聞くと雀は、

「あ、わかつちやいました？ 有名ですからねえ、私の昔話。でもまさかここまで有名になるとは思ってもみなかったので私自身かなり驚いているんですけどね」

と少し照れたように言った。

俺はその言葉を聞いて確信を得ると、

「……なるほど、やはりお前は舌切り雀だったか」

と納得した。

あれ？ という事は大きいつづら選んだら俺死ぬんじゃない？

……ヤバイヤバイ、なんとしてもそれは防がないと。……という事で、つまり生き残る為には小さなつづらの方を選べばいいという事が……。

……いや、実はそれはフェイクで小さいつづらの方が罠かもしれないな……。と思っただら裏の裏をかい大きい方……。と見せかけて小さい方……。じゃなくて大きい方……。かもしれないが実はビツク、いやスマール、BIG？ SMALL？

「……て、どっちだよ……!!」

俺は思わず叫んでしまった。

その声に舌切り雀は少し驚いたのち、

「……えーと、あの、もしつづらを選ぶのに迷っているのでしたら心配しなくても大丈夫ですよ？ どちらを選んでも家に帰るまで決して開けないと約束していただければ大丈夫です」

と困惑した感じで言った。

一方それを聞いた俺は、

「え？ あ、そうなのか？ ……て、じゃあ帰る前につづらを開けてしまったら？」

と恐る恐る聞いてみると……、

「一瞬で死にます」

「一瞬かよ!？」

俺は思わずつつこんでしまった。

つーかお前、なんでそんな軽い感じで死ぬとか言える訳!? 普通通言えないだろ!!! しかも一瞬でお前ただけだよ!!! だいた

い命の恩人に対して命がなくなるかもしれないプレゼントを渡すか？ 恩を仇で返すつもりかよ！！ それにさっき最近の子供は命の重さを知らないと言ってたけど、お前の方が絶対知らないだろ！！

「まあまあ、そんな恐い顔しないで下さい。このつづらは持ち主の手で開ける以外に開ける方法はありません。だからなにかの拍子に落としてしまつてつづらが開くといった事故で死ぬことはないのだから安心して下さい。……まあ、つまり何がしたいのかというと、これはただ純粹に私の約束を守るか試しているというわけです。……ま、桐島さんは約束を破るような人ではなさそうですし……心配ないですね。」

俺の慥然とした表情から心を読んだのか、雀は俺に対して宥めるように言った。

うーん……なんかいいように丸め込まれている気がするのだが……

と俺はまだ釈然としない様子だったがそこへ、

「ところで桐島さん。その服装からして学生ですよ？ 学校に行かなくて大丈夫ですか？」

と雀は不思議そうに聞いてきた。

俺はそれを聞いた瞬間、

「やべっ！！ 学校へ行く途中だったって事すっかり忘れてた！！」

と慌てて小さいつづらの方を手に取り鞆に入れると、

「あ、えーと、まあ、暇だったらいつでも会いに来てくれ、まだ話したい事が色々あるし、俺は大体いつも暇だからさ。と、いう訳でこのつづらは有り難く貰っておくよ。じゃあな！-」

と言って俺は猛スピードで走り出した。
その時後ろから、

「え、あ、桐島さん！！ えーと、とにかく本当にありがとございまして！！ それで、機会がありましたら喜んで貴方に会いに行こうと思いますのでよろしく願います。あつ、あとつづらは必ず帰ってから開けて下さいよー！！-」

という雀の叫び声が聞こえたが、それに対して俺は後ろを向かずに手を軽く振って答え公園をあとにした。

舌切り雀・壱（後書き）

うーん、小説を書くのは難しいですね（^ー^；）
初めてこういった物を書くので、なかなか上手く書けません……。
ですが、諦めずに自分のペースでのんびりと書いていこうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6120c/>

夢現

2010年10月22日00時49分発行